

アムステルダム運河地区は水辺都市

Embassy of Japan Kingdom of the Netherlands
Office for Science and Technology Senior adviser Rob Stroeks
(在日オランダ王国大使館科学技術部、シニアアドバイザー：ロブ・ストロークス)
リバーフロント研究所 理事 土屋信行

アムステルダムは美しい運河に囲まれた都市として2010年8月に世界遺産に登録されました。アムステルダムのシンゲル運河内側にある17世紀の環状運河地区(Seventeenth-century canal ring area of Amsterdam inside the Singelgracht)です。運河の街アムステルダムの中でも、この地区は数世紀の時間を重ね、趣のある煉瓦の街並と、数多くの運河に橋の架かる美しい風景で知られ、1999年よりオランダ政府が公式に保護・保存をしてきました。オランダ黄金時代におけるアムステルダムの経済的、政治的、文化的な繁栄が形となって残った貴重な遺産であり、都市デザインの面や建築の面からも価値があります。水辺の運河都市、アムステルダムを理解するには歴史を知っていただくことが近道です。



アムステルダム

アムステルダムの歴史

アムステルダムは13世紀に漁村として築かれました。伝説によれば、犬を連れて小さなボートに乗った2人の猟師が、アムステル川の川岸に上陸して築いたということになっています。アムステル川をせき止めた(アムステルのダム：Dam in the Amstel)というのが街の名前の由来ですが、ここで言うダムとは日本の皆さんが考えるような大きなダムではなく、堤防とか、堰という意味です。1287年12月14日、北海からの高波がゾイデル海に流れ込み、聖ルチア祭の洪水と呼ばれる大水害を引き起こしました。これによってゾイデル海は大きく拡大するとともに、北海へと開口することになり、ゾイデル海の一帯奥にあるアムステルダムが海陸の接点として注目されることとなったのです。ゾイデル海は現在では北海からの高潮被害防止と干拓事業を目的として造られたアプスライトダイク(大堤防)によって締め切られアイセル湖となっています。1300年(または1301年)に自由都市となり、14世紀にはハンザ同盟との貿易により発展し、やがて15世紀にはハンザ同盟をしの

いでバルト海交易の中心地となっていったのです。15世紀から「Nederlanden」、「Nederlant」、「Niederland」、「Niderlant」、「Lage Landen」などの言い方になってきました。「より高い地域に対して低い地域」または「海に近い低い地域」を表す言い方で、地形から生まれた言い方です。当時のドイツ語では「Nieder」で始まる地名が多く、例えば中世期の終わりにマース川とライン川の間の低地を「Niderlant」と呼び、高地のケルンであるOberlandに対する言い方でした。その言い方がスケルド川、マース川とライン川がオランダまで流れるデルタにも使われ複数形の「Nederlanden」となったわけです。ちなみに、Amsterdamの古い言い方として、1300年に都市の権利を取得した「Amstelredam」が、その後の都市拡大に伴い「Amsteldam」とも呼ばれるようになりました。1384年から1477年の間、ブルゴーニュ公爵が治めたブルゴーニュ領ネーデルラントがあり、その後1477年から1556年まではネーデルラント17州の言い方となりました。16世紀には当時ネーデルラント17州を支配していたスペイン王フェリペ2世やその後継者に対する反乱が起こり、八十年戦争へ発展しました。この間、アムステルダムは独立派に属して



アムステルダム・1538年

いました。1585年8月に南ネーデルラントのアントウェルペン(アントワープ)がスペインのパルマ公アレックスサンドロ・ファルネーゼに降伏すると、アントウェルペンの新教徒商人がアムステルダムへと続々と移住し、アムステルダムはそれまでのバルト海交易のみならず、それまでアントウェルペンが支配していた地中海交易や新大陸、アジアからの交易をも手に入れ、これによってアムステルダムは世界商業・金融の中心地となっていったのです。独立を獲得したオランダ共和国はその宗教的寛容さで知られ、スペインやポルトガルからユダヤ人が、アントウェルペンから豪商が、フランスからユグノーが安住の地を

求めてアムステルダムにやって来ました。フランドルからの豊かで洗練された移住者はオランダ語の基礎を作り、オランダの商業的発展の礎を築いたのです。



アムステルダム・1662年

17世紀はアムステルダムの黄金の時代と考えられています。17世紀初頭、アムステルダムは世界で最も裕福な都市であったといえます。アムステルダムの港の喫水は浅かったのですが大変広がったため、交易の結節点ならびに商業の中心地としての魅力はその欠点を十分に補いました。1595年、アムステルダムの商人はコルネリス・ハウトマンの船団をアジアへと派遣し、船団はジャワ島から東方の物産を積んで帰国しました。これによって東方貿易ブームが起きるのです。あまりにも過当競争となったために、1602年に東方貿易の独占権を持ったオランダ東インド会社が設立されたのです。アムステルダムの港を発する商船は、北アメリカ大陸やアフリカ大陸を始め、現在のインドネシアやブラジルまで含めた広大なネットワークを築き上げました。アムステルダムの貿易商は世界最初の株式会社といわれるオランダ東インド会社(VOC)やオランダ西インド会社(WIC)を設立し、これらの特許会社は後世のオランダ植民地を形成する海外権益の基礎となりました。アムステルダムは欧州で最も重要な交易市場であり、世界を牽引するファイナンシャル・センターでもあったのです。アムステルダム証券取引所は世界初の常設取引所となりました。ヘーレン運河、プリンセン運河、カイゼル運河といった運河が同心円状に建設され、アムステルダムの運河網が形を整えていったのもこの時代なのです。

オランダはこの時代世界でもっとも出版の自由や言論の自由、思想の自由が保障されている国であり、宗教的にも寛容であったため、ヨーロッパ各国から文化人が亡命し、オランダ、特に最大都市であるアムステルダムに居を構える者が多く現れました。アムステルダムにはこの当時400軒の出版業者が軒を連ね、ルネ・デカルトなどもアムステルダムに落ち着いています。こうして、アムステルダムは文化の中心となっていったのです。

18世紀から19世紀前半にかけては、アムステルダムの繁栄にも陰りが見えました。イギリスやフランスとの相次ぐ戦争はアムステルダムの富を失わせました。ナポレオン戦争の頃がどん底でありました。

しかし、1815年にオランダ連合王国が建国された頃から徐々に復興し始め、19世紀終わり頃は、2度目の黄金時代と呼ばれます。この時期にアムステルダム国立美術館、アムステルダム中央駅、コンサートヘボウが建てられました。同じ頃、産業革命がこの地にも到達し、1876年には全長21kmの北海運河も開通し、北海への最短ルートを確認でき、北海運河のアイマウデン閘門(北海出口部)るようになりました。



北海運河のアイマウデン閘門(北海出口部)

1952年には全長72kmのアムステルダム・ライン運河が開通し、アムステルダムからライン川へ直接アムステルダム港からユトレヒトを経由してライン川の支流であるワール川を結ぶことが出来るようになりました。途中、3箇所でレク川と接続され、ロッテルダムや北海へ通じることも出来ます。1965年から1981年には運河の拡幅工事も行われています。この2つのプロジェクトの完成は、欧州内陸部と外部との通商を活発にしたのです。

運河都市アムステルダムの魅力

運河の街アムステルダムの中でも、世界遺産地区には数世紀の時間を経た煉瓦の街並と、数多の運河に橋の架かる美しい風景で知られ、オランダ黄金時代におけるアムステルダムの経済的、政治的、文化的な繁栄が形となって残った貴重な遺産であり、都市デザインの面や建築の面からも価値があります。



アムステルダムの運河

まず、一番内側にある「シンゲル運河」は16世紀に作られ、中世の旧市街を囲んでいます。その外側には17世紀に作られた3運河「ヘーレン運河」「カイゼル運河」「プリンセン運河」があり、その外側に、世界遺産の名称になっている、もう一つの「シンゲル運河」があります。この運河の内側の歴史的景観を含めたエリア全体が世界遺産です。アムステルダムの街は、港と中央駅を中心として円心状に次々と運河が造られ、外へと広がっています。

アムステルダム運河システムの多くは、都市計画の優れた産物です。アムステルダム16世紀末以降、国際的な中継貿易の拠点となると共に、ヨーロッパ商業の変化に適応し、ジェノバに代わって国際的な金融市場の機能も備えて急成長したのです。アムステルダムの人口は、3万（16世紀末）、10.5万（1622年）、22万（1670年）と急増していったのです。そうして17世紀初頭に増大した移民に対応することと防衛上の観点から、アイ川を終端とする4つの主要な半円状の運河を含む包括的な都市計画が立案されたのです。アムステルダムは、運河を中心として計画されていますから、運河から臨む街の景観が、美しいのは当然のことでしょう。



シンゲル運河

中でも、ライチェ通りからファイゼル通りのエリアが特に美しい街並みとして人気があります。また、アムステル川にかかる「マヘレの跳ね橋」は、木造の跳ね橋であり、夜にはライトアップされる有名なスポットです。アムステルダムに張り巡らされた運河のうち、一番外側の大運河、シンゲル運河に囲まれた地区が世界遺産に登録されています。干拓で造りあげた居住区を、160あまりの運河と1300あまりの橋でつないで街は造られています。港を中心にして、港と居住区をつなぐことで、海外からの商品を自由に移動させることができただけでなく、こうしてアムステルダムは世界の水運都市に成長したのです。



マヘレの跳ね橋

川沿いの17世紀から残る市民の家々は、流通に便利だったため、間口の広さに応じて税金がかけられました。このため、運河沿いに現在も残る家並みは間口がどこも狭く、その代わり奥に非常に長く伸ばして作られています。間口は5、7mで統一され、建物に囲まれた真ん中に中庭が造られました。この地域の建物はほとんどが3、4階建てで、鉛筆のような形をしています。家の奥行きは30メートルほど有り、京都の町家（町屋）のような造りです。市民が運河

に面した入り口を平等に持ち、荷物を運び込めるように工夫したのです。この運河沿いの建物は現在も保存され、運河には観光用ボートや水上バスが走り、アムステルダム観光の目玉の一つとなっています。王宮から真西に行った運河沿いにはアンネフランクの家があります。当時のオランダには、王侯貴族はいませんでした。オランダは、世界で最初に市民社会が成立した場所とも言われています。その市民社会の人々の姿を描いたのが、オランダの国民的な画家レンブラントです。彼の代表作「夜警」には、火縄銃を持ち、パトロールに出



アムステルダムは自転車のまち（シンゲル運河）

市民自警団の姿が描かれています。

その表情には、自分たちが築いた街を自分たちで守ろうとする気概があふれています。海拔0メートルの面積が国の約25%、高潮の洪水があると国土の約半分が水没する危険性のあるオランダでは、水防組織も自分たちで守るという取り組みをしています。世界で最も古くからあるコミュニティー組織と言われる「ウォーターボード」という組織が有り、国民自らが水防に取り組んでいるのです。ここで使われる予算も「ウォーターボード税」という目的税を特別に集めています。



クロフェニルス運河の跳ね橋

アムステルダムの運河・シンゲル運河

放射状の運河の最も外側に位置するのがシンゲル運河です。この運河は、1480年から1585年にかけてはアムステルダムの外堀にあたっていました。王宮の南西、シンゲル運河にほど近いライッツェ広場には市立劇場があり、交通の拠点ともなっています。またライッツェ広場周辺にはバーやレストランも集まっていて、シンゲル運河の南側にはアムステルダム国立美術館があります。そこから南西に広がるミュージアム広場にはゴッホ美術館、アムステルダム市立近代美術館、そして世界有数のコンサートホールであるコンセルトヘボウがあり、多くの観光客が集まってきます。コンセルトヘボウにはロイヤル・

コンサートヘボウ管弦楽団が本拠を置いています。市の南西部は高級住宅街となっており、フォンデル公園などがあり、ミュージアム広場から西へと伸びるP.C.ホーフト通りには高級ブランド店が立ち並んでいます。市の南部にはオランダ近代建築の父といわれるヘンドリック・ペトルス・ベルラーヘが、アムステルダム南部市域拡張計画においてプランニングし建設した地区が現在も残っています。

ヘーレン運河

17世紀に建造された三運河では最も早く建造されました。その名は16世紀から17世紀に都市を統治した商人層 (heren regeerders) にちなんでいますが、オランダ東インド会社の設立者にちなむとも言われています。最もファッショナブルな区域は「黄金の湾曲」(Gouden Bocht) と呼ばれており、この運河の両岸には特徴的な外観の建物が並び、その間口と奥行きは規格化されていますが、その正面を飾る破風壁が特徴的です。模型の土産品にもなっている、三角破風

を發展させて階段状になったトラップヘーベル(階段破風)を備えた住宅が見られ、特に1617年に富裕な醸造家



バルトロッティ 2500隻もある運河に浮かぶハウスボートが建てさせた階段破風が特徴的な邸宅は、イタリア・ルネサンスの様式を取り込んだオランダ・ルネサンス様式の代表例とされ、現在は演劇博物館となっています。その隣の家も特徴的で、破風壁の中央部分だけが垂直に伸びたハルスヘーベル(頸型破風)を備えた邸宅となっています。ここまでは17世紀前半の様式ですが、近くには18世紀フランスの古典主義の影響を受けた軒蛇腹様式と呼ばれる様式の家も並んでいます。これらの家は海拔0mの軟弱地盤に無数の木杭を打ち込んで建てられました。アムステルダムは木杭の上に築かれた都市なのです。森林のないアムステルダムではこれらの木杭も、貿易により輸入されたもの

なのです。アムステルダム中央駅は8700本もの木杭の上に建設されています。この工法はアムステルダム



中央駅をモデル ハウスヘーベル(頸型破風)の家

に造られた、明治時代の東京駅にも採用されたのです。

カイゼル運河

三運河地区の2番目の運河であるとともに、もっとも幅広い運河です。「皇帝の運河」を意味するその名前は、神聖ローマ皇帝マクシミリアン1世にちなんでいます。カイゼル運河沿いの建築には、ヘーレン同様に階段破風や軒蛇腹様式の建物が見られますが、その中でも118/120番地の間口の広い建物は、近代建築の先駆者の一人であるヘンドリック・ペトルス・デルラーヘ(1835年-1934年)が暮らしていたことで知られています。また、対岸には置時計を模したような破風壁のクロックヘーベル(鐘形破風)の建物が見られ、ハルスヘーベル(頸型破風)とクロックヘーベルはトラップヘーベル(階段破風)よりも後の形式で、いずれも美しい装飾性を備え、18世紀末まで好まれました。1671年に穀物商人ファン・レイが建てさせた邸宅は、18世紀に内装がバロック様式に改修され、現在はファン・ローン美術館になっています。

プリンセン運河

アムステルダムの主要運河の4番目で、もっとも長い運河です。「公の運河」を意味するその名前は、沈黙公ウィレムにちなんでいます。運河沿いの建造物群のほとんどは、ネーデルラント連邦共和国の黄金時代に建てられたものです。運河に架かる橋はヨルダーン地区にはつながっていません。ヨルダーン地区とは、かつてスペインやフランスでの非カトリックに対する弾圧から逃れてきた人々の居住区となっていた歴史地区です。プリンセン運河沿いの観光名所としては、北教会(Noordekerk)、北市場(Noordemarkt)などのほか、アンネ・フランクの家があります。アンネの家は1635年に建てられたものですが、18世紀に裏側部分が増築され、アンネたちが隠れ住むのに使われることになったのです。西教会(Westerkerk)はプリンセン運河とカイゼル運河に面する高さ85mのプロテスタントの教会堂で、1620年から1631年にかけて建造された当時としては、世界最大級のものでした。



プリンセン運河

アムステルダムはこれからも運河を大切にし、この景観を後世に伝えていく責任があります。そして多くのお客様をお迎えしたいと思います。